

---

# 【ヘタリア】追憶のヘタリア

徘徊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【ヘタリア】追憶のヘタリア

### 【Nコード】

N0699Z

### 【作者名】

徘徊

### 【あらすじ】

黒い星に願い事をする、願いが叶う  
という言い伝えを聞いた。

国が消えて、世界が壊れていく。

失われて、現れて。

国等はこの無限のループから抜け出し、悲劇のゲームから抜け出せるか。

地球を巻き込んだ悲しみと希望と悲劇と絆の二次創作。

？もし良ければ感想を下さいな！

## プロローグ

昔のはなし。

全てが闇に包まれて  
永遠の夢を悲しむ  
道なき道は道ではなく

なんだっけ。

？

「獣道だろ？」

横に居たロマーノが口を挟んだ。

「え、そうなの？」

イタリアは手に持っていた本を閉じて置いた。

その本の名前、《三日月道》

道はなんだ、とか、道につながる、

夢、だとか、嘘、だとか、

いろいろ書かれていたが、

とりあえずは絵本に入る、不思議な本。

イタリアはまた開き、読み始めた。

言い伝えに残るは

紅い華と蒼い華  
両方開けば道になる  
道にならないことなれば  
運命今に開かずや  
黙も闇も溶け込むだろう  
戻ることままならず  
猛き者終に及び  
新しく世界は終わる  
新しき世界は始まる  
それもまた

「運命、かあ」  
ヴエ、ヴエ、と鳴いた。

「なんか怖い本だな、それ。こんなものスペイン持ってたのか？」  
ロマーノは、本を覗き見た。

挿絵は、黒い宇宙に、青い惑星、地球が、  
罅をいれて割れる様が、クレヨン調で描かれていた。

と、まあ、ここはスペインの家である。

ロマーノはいつも通り、部屋の整頓としてスペインの部屋を掘り返  
していたが、

イタリアは意味もなく、ここに来ていた。

ロマーノはイタリアから本をひつたくと、パラパラとページを捲  
り始めた。

そこで、気になるページを見つけたのか、その場所をまじまじと見  
た。

挿絵には、黄色い髪の毛で、どこかの人形みたいなものが、

大きく描かれていた。

というか、顔がアップで映されたようなものだ。

背景が真っ黒なのに、その人形の肌も黒いのである。

全体的に真っ黒なページに、白い文字でこう綴られていた。

人及び国は傲慢である

未知なるものに目を奪われる

幸せを永遠に求める

ある人形はこう告げた

そんな輩はわたくしが

茨で包んで育みましょう

育った花は私のもの

私だけのお人形

それを聞いたある国は

栄えていたのに争いで

争いで消滅した

「なんだこれ……」

「<sup>いさか</sup>争いで？それって、戦争かな？」  
「しらねえけど……」

巻きつく<sup>つた</sup>薦は一度きり  
犇<sup>ひし</sup>めく祭壇  
悲劇に憑りつかれ  
何時をも漂う  
歩いて歩いて  
迷うに値し  
友を傷つけ  
いつまでこの世を彷徨うか

「こんなことばっか書いてあるのか？」  
「ヴェー、スペイン兄ちゃん、変な趣味ー」  
と、そこで、スペインがタルトを持って帰ってきた。  
「ロマーノ、イタちゃん！タルトやで！ベルギーが作ってくれたん  
や」  
「わあい！！ベルギー大好きー」  
「ふん、休憩にするぞ、コノヤロー」  
と、散らかった部屋のど真ん中で、食べ始めた二人。

あの本には、まだ続きがあった。  
ただ、破られていた。  
何処に行ったのかもわからない。

その本には闇がある。暗い暗い、闇が。

まだ、何も始まらない。

静寂が終わる。終わりが始まる

## プロローグ 2

あ、永遠が終わる。

黒い星、光った？

私の出番？

嬉しいな

壊せるな

楽しみだ

行こうかな

よし行こう

？

「ヴェ、なんだっけ」

突然イタリアが何かを思い出しそうな感じになった。

「黒い星、光る？んー、思い出せない……」

「星？知らないぞ？」



あれから、スペインはまた、農業をしに行った。

スペインの部屋には二人しかいない。

ちゃんと片付けえな、という、部屋の持ち主の話も聞かず、  
まだまだ荒らすつもりのような。

「あ、そうだ、思い出したよ兄ちゃん」

「おう、言ってみろ」

「黒い星、流れ星に願い事をする、願いが叶うんだって！」

「え、まじかよ！でも、黒い星、って、見えねえんじゃねえ？」

「黒くても、光ってるからわかるんだって」

と、そういう話から、

「そうだ、明日、皆に言おうかな」

「わかった、広めるんだな」

と、主旨が変貌した。

で、それから、イタリアは、普通に帰宅した。

何もない。皆無。特別なことは何も、何もない。

なのに、イタリアは、眠れなかった。

わくわくして、ただの噂だった黒い星を、

皆に広めたい、そう言った気持ちでいっぱいだった。

少し、おかしくなったかのような。

何かに、憑りつかれたような。

それから、二時間はベッドの中で眠れずにいたが、  
とうとう睡魔に勝てず、寝てしまった。

そして、終わりが近くなっていく。

？

明日？明日かあ

楽しみだなあ

緊張するなあ

楽しみだなあ

壊したいなあ

終わらせたいなあ

楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ  
楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ  
楽しみだ

楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ  
楽しみだ楽しみだ楽しみだ  
楽しみだ

みだ楽しみだなあ

？

日が昇る。

今夜が最後だ

今夜終わる

人形が、動く

？

「ヴェー、おはよう！」

元気よく起きたものの、まだ空が暗いままだ。  
早く、起きたんだ、俺。

と、愉悦感に浸ってみる。

陽は、そろそろ昇る。

日本はもう起きてるかな。

ドイツは起きてるかな？

でも、意味はないのかな

いつ起きても、同じこと

あれ？

俺、いま、何を考えた

？

イタリアは勢いよく首を横に振った。  
なんか俺おかしい？  
おかしくない、俺は俺だし

でも、いまの、俺？

……まあ、いいかなあ

そして、ベッドから降りた自分の恰好が、軍服を着ていることに気付いた。

うわあ、俺、このまま寝てたの！？

「ヴ、ヴェー」

泣きそうな声で鳴いた。

あ、今日は世界会議だっけ。  
何をすればいいっけ？  
そうだ

ク  
ロ  
イ  
ホ  
シ

うん、楽しみ。

皆に言わなきゃ。

それから、ドイツ、日本に電話した。

「一緒に、会議行こうよ」

?

ユ  
メ  
モ  
コ  
ワ  
ソ  
ウ  
セ  
カ  
イ  
ト  
イ  
ッ  
シ  
ヨ  
ニ  
ア  
ト  
ニ  
ナ  
ニ  
モ  
ノ  
コ  
ラ  
ナ  
イ  
ヨ  
ウ  
コ  
ナ  
ゴ  
ナ  
ニ  
ク  
ダ  
イ  
テ  
シ  
マ  
オ  
ウ

サ  
ア、  
セ  
カ  
イ  
ガ  
コ  
ワ  
レ  
ル

「あ、日本ー」

「い、イタリア君!!」

世界会議の時間の一時間前。

待ち合わせの時間の三十分程の時間。

とてもはやい、そんな時間に。

イタリアがやってきた。

「イタリア君!!と、とても早いですよ、どうしたんですか……」

「えー、なんか、早く来ちゃったから」

赤飯、もう少し炊いておけばよかったです、と、

日本は呟いた。

それから十分後にドイツが来た。

「な、な、何故だイタリア!!」

「え、何でって言われても……」

やはりドイツも感心して歓心したようだった。

俺、やっぱりこの二人が大好きだ。

イタリアは改めて思った。

この二人は壊したくない？

え？

ふと無意識に意識して考えたその言葉。  
二人を壊す……、どういう意味だろう。  
というか、俺は一体？

あれ、頭が痛い。

イタイ？

「え？」

「どうした」

「イタリア君？」

二人は何かを話していたようだったが、わからなかった。

「何か言ってた？」

「ああ、今年の事業企業のことを」

「イタイって、言った？」

「いいえ、痛い、とは……？」

俺にもわからない。

頭が痛いってだけで……

イタイ？コワレル？



「な、なに!？」

「どうした、イタリア!」

「少しおかしいですよ、イタリア君。如何なさいました?」

「だ、だいじょう

「  
コワスコワスコワスコワスコワスコワス

」

イタリアの声で、ある単語が繰り返された。

「な、い、イタリア!?!?!??」

「どうしたんですか、イタリア君?!」

「..... なにも、ないよ」

「何もないわけないだろう!？」

「大丈夫、声が聞こえるだけ、違う」

「声.....?」

「違う、頭が痛いだけ」

「そんな風には

」

「いいから、会議場、いこう」

イタリアは、無理をしているように笑った。



？

会議場に着いた三人。

ドイツと日本は心配そうなめをイタリアに向けている。

向けられている当人は、少し白い顔をしながら笑って、既に集まっている国達に、

「おはよう、皆元気？」

と挨拶をした。

「お、イタリアー。お前はやいなあ、今日」

と、メイドさんと話していた男が、こちらを向いて言った。  
フランスである。

「うん、今日は早く起きたんだ」

と、イタリアはその男のもとに駆け寄った。

残された枢軸の二人は、首を横に振って自分たちの席に座った。

「どうしたあるか、なんか暗いあるよ、日本」

「中国さん……」

後ろからウーロン茶（hot）を差し出されて、後ろを見た。

メイドさんに止められている中国がいた。

「中国さん、私がやりますよ、お茶を淹れることくらい！」

「もうやってしまったある。きにすんなある」

「……」

何をしたいんだ、とか思ってしまった日本だったが、かぶり頭をふった。  
優しさでやったんだろう、とも思えた。

その一方で、ドイツは謎のマニュアルを読んでいた。  
題名は、『うわごとと魔術』

おそらくイタリアのさっきのことで調べていたのだろう。  
しかし、似たようなことが書かれていない。  
頭を悩ませた。

会議場に居るのは、

紅茶を飲むイギリス、

ナンパをしているフランス、

リトアニアとラトビアをニコニコとみているロシア、

メイドと口論している中国、

オーストリアとハンガリー、

中立兄妹、

スペインとベルギー、オランダ、

エストニアともちも次いで、

北欧はアイスランド、ノルウェーの兄弟を抜いた三人、

枢軸の三人が、

それぞれ自分たちのことをしていた。

そこに、バアン、と大きな音を立ててドアを開ける人物がいた。

「よし、今から世界会議を始めるぞ！！　ってあれ？　なんか地味に少なくないかい？」

眼鏡を押し上げてまじまじと、集まっている国の顔を眺めた。

「まだ時間じゃねえぞ。しっかり時計見ろよ」

とイギリスが言った。

「ふうん。それにしてもイタリア、今日は早いね！」

「うん、頑張っただけだよ」

普通に答えた。

まだ、序の口だ。  
まだ、全然、甘い。

苦しめよ。

？

そして、それから何人集まったのかというと。

ずらっと並ぶことになるのだが、

何故か台湾、香港、マカオ、ベトナム、韓国、  
アイスランド、

ロシア、ベラルーシ

とまあ、半分も集まらなかった。  
と思ったら、カナダもいた。

「寝てたら、クマ権三郎さんに引つかかれて……」

と、クマ次郎を抱えて、顔に爪傷を負って来た。

それから、集合時間が過ぎてしまったので、

「よし、もう待ってられないんだぞ！今から世界会議を始めるんだぞ！」

と、自称ヒーローが声を張り上げた。

「今回の議題は、最近の金融関係なんだぞ！TPPが……」  
と始めたところで、

議会の内容はどうでもいいと思うので、  
疑問にいくつか焦点を合わせてみよう

Q1 なんで国じゃないやつらが地味に居るの？

A1 台湾曰く「老師今日朝から腰悪くしちゃったよー、不安だよ」  
「

香港曰く「なんか very flee だったつす。意味なんて無いです的な」

Q2 なんでアイス居るのにノル居ないの？

A2 アイス曰く「トロールで今手が離せないんだって」

Q3 ベラ居るのにウクは？

A3 本人曰く「今頑張って内職してるの、ごめんね、ロシアちゃん」

Q4 お餅連れてきてるエストって……

A4 本人曰く「最近この子たち喧嘩ばかりですから……」

という具合である。  
みんな忙しいのだ。  
そうこうしている間に会議も大荒れを見せる。

「まあたイギリスそんなこと言っちゃってさあ、お兄さんそろそろ

限界」

「ばーか、俺だって限界だからな、もうそろそろ、限界超えるんだぞー!」

「何張り合ってるんだい!? そんなことで張り合っても意味ないだろう!？」

空き缶、ボールペン、本、スコーン etc……と、いろんなものが会場を飛び交う。

「もう、いい加減にしないか! ！いつも通り、発言を慎め! ブツ」

と、ドイツの一喝と説教が始まった。

そして、場が静まったとき、日本はイタリアを見た。

俯いているイタリアは、ブツブツと何かを言っていた。

次の瞬間。

イタリアはハッと顔を上げて、大声で言った。

目が、開いていた。奥に鈍い光を放つ、そんな目を開いて。

「黒い星、黒い星だよ、すべては、そこで始まって、そこで終わるんだ!」

辺りがざわつく。

「イタちゃん……?」

スペインは立ち上がった。



「聞いてて!!!」

イタリアは立った方を見て、声を張り上げた。

「今夜、その黒い星が現れる。そしたら、願い事をその星にするんだ!!!」

それは、前日、ロマーノと話したことだった。

「絶対願いはかなう。叶えてくれる、あの人が!!!」

そう言った彼は、いきなり立ち上がって、扉の方へよろよろと歩いて行った。

「ねえ、みんなも、一緒に」

そこで、張り詰めた糸が切れたように、ぷつりと、イタリアは倒れこんでしまった。

？

倒れたイタリアは、自称ヒーローによって帰宅させられた。  
もちろんドイツと日本もイタリアの家へ行った。

議会なんてもの放置な感じだった。

「というわけで、イギリスう、後は頼むぞー！」

とかアメリカは言っていた。

そして、ヒーローも含めて四人が会議場を去ったとき、  
イギリスはあたかも何もなかったかのように、続けた。

「なあ、気になってしょうがないんだが、黒い星ってなんなんだ？」  
フランスが答えた。

「そんなの聞かれてもわかるわけないじゃん、知らないし、聞いた  
ばっかだし」

氷「でも、今晚その星が出るって言ってたよね」

芬「予測、でしょうか？　でも、確信があったように聞こえますが」

西「よし、ロマーノ心配や、俺、帰るでー！！」

蘭「さつさとけれ」

白「ああ、兄ちゃん、そんなこと言っちゃあかんのに」

リト「でも気になるよね。ねえ、ポーランド」

波「願い事叶うんだったら、おれ、願い事するしー！」

英「セーシエルに聞いてみるか……」

ドイツが居なくなるとコメントだらけになる。  
これは世界がとても元気という証拠だ。

奥「イタリアの様子が気になりますが」

洪「伊塔ちゃん、大丈夫かしら」

瑞「あ、あっこ……（あそこ）」

丁「どした？あ、プロイセンの肩に乗ってる鳥だがや」  
氷「え、なんで」

丁「んー、わかんねえなあ」

芬「後でプロイセンさんに聞いてみましょうか」

・・・・・・・・・・・・・・・・

終わらないのでスルーで行こう。

会議の終わった後。

アメリカはそのまんま帰ってくることはなかった。

そのかわり。

大体の国に

呪いは伝わった。

呪いを実行するのは彼ら次第だ。

そして夜。

イタリアは目を覚ました。

まだ黒い星は出てこない。

そしてイタリアは外に出た。

横には、日本とドイツが立っている。

心配そうな目で。

イタリアの目には、光という光は灯っていなかった。



## 一章 行方不明と日常崩壊

それでも事は進むから

？

ロマーノが心配とか言つといて、スペインはしっかり最後まで世界会議に参加した。  
かなりオランダは不機嫌そうだったが、ベルギーはそれを、一生懸命たしなめた。

世界会議後

「ロマーノ！大丈夫やったか！？」  
スペインは、ばぁんと扉を開いて自宅に入る。  
しかし、何の声も、鳥の声しか聞こえない。  
もうすでに暗いし。

ロマーノ？

それこそ心配になった。

ちよつとした思い当たりがあつたので、ベランダに向かった。

おつた。

そこには、空を見ているロマーノが居た。

「大丈夫か、ロマーノ？」

その背中に声をかけてみたが、返事が来ない。

どうした？

そつと近づいてみると、ロマーノがゆっくり振り向く。  
月明かりに照らされたロマーノの顔。  
目には光が浮かんでいなかった。

「スぺ……イ……」

そこで、ロマーノは崩れ落ちるように倒れた。

「なッ、ロマーノっ!!??」

?

ねえ、あの方は願いをかなえてくれるんでしょう。

?

「ねえ、これで……いいのかなあ」

イタリアはベランダで呟いた。

黒い星が鈍い輝きを放ち瞬いていた。

そして一言。

「ドイツと、日本と、一緒に、ずっと、一緒に」

居たいなあ……

そこで、倒れこんでしまった。

ドイツがそれをしっかり支えた。

「イタリア君……」

？

ロマーノが倒れた時と、イタリアが倒れたとき

同じ時間だった。

？

日本の携帯に一本の電話。

はつきり言ってそれどころではない

アメリカからだった。

「はい、日本です」

【俺だ、アメリカだ！緊急なんだぞ！！】

「どうされたんですか……」

【カナダと連絡が取れないんだよ！！ 会って約束したのに……】  
「え……？」

？

終わるからね。



？

それから、幾度も幾度も電話がなってきた。  
各国から、いろいろと。

全て、行方不明者の報せだ。

次第にその電話はとぎれとぎれになった。

初めは電話する側だった、アメリカも、イギリスも、  
とうとう行方が分からなくなった。

「一体、なんなんでしょう……」

沈黙を破ったのは、珍しく日本だった。

？

イタリアが倒れて、何分か経った時、スペインから連絡があったのだ。

出たのは日本だ。

「もしもし、スペイン」

「にほおおおおおん……！！」

「ちょ、ちょっと、音量を下げてください、ええ、そうすべきです」

「日本、何か今日主張性あるな」

「す、すみません……」

「そんなん言つとる場合ちゃうんやって！！ローマーノがな！？ローマーノが！！」

「述語をお願いします！」

「日本……」

「倒れたんや！何か知らんけど！いや、心当たり無くはないんやけ

ど、ええと……」

「つ、通話料が……」

「落ち着け、スペイン！……！！！」

ドイツが一喝した。

電話の外まで声が漏れていたからだ。

少しの沈黙が過ぎる。

「す、すまん、ちょっと慌てとつた……」

「ちよつと……？」

突っ込みどころが多量ですね……

日本は八つ橋にその感情をくるんだ。

「ロマーノが倒れてん、心当たりはアレなんやけど、日本どう思っ  
？」

「アレ……、確かにそうですね」

日本は電話をスピーカーオンにした。

「なんやけど、ほんまようわからんねん」

「ですよ」

「んで、日本の家の言葉で、百聞は一見にしかずってあるやろ？」

「え、ええ」

「ちゆうことで、俺ん家にイタちゃん連れてきてほしいんねんよ」

「……えっ」

「なに？」

「イタちゃん心配やもん。ロマも心配なんもん」

？

というわけで、いま日本とドイツは、イタリアを担いでスペインの家へ行った。

ロマーノの眠っているベッドに、一緒にイタリアを寝かせた。

そこからの沈黙を、日本は破ったという形になる。

もう電話は来ない。

行方が分からなくなった国は、沢山ある。

プロイセンの小鳥も帰ってこない、と言った。

一体どこに居るのだろうか。

?

僕。

起きて、大人の僕。

目を開けて、見て。

今、  
今を

「だ、誰……？」

イタリアが呟いた。  
 つて、あ。

つて、あ。

俺、寝てた……？

「い、イタちゃん!」

スペインが喜んだ。

「イタリアあああ！」

ドイツが駆け寄る。

「い、イタリア君……」

日本が呆然としている。

「ひ、ひいっ！！！！！！！」

イタリアが、三人を見渡して、叫んだ。  
そして、問題な発言をした。

「どうしたの、ドイツ、日本、スペイン兄ちゃん！何があって、こ  
んな……」

「は？」

三人は同時に呟いた。

「部屋が、血だらけ！廃れてる！ドイツも日本も、スペイン兄ちゃ  
んも、血だらけ……、  
ゾンビみたい、こわい、こわい、怖いよう……」

「い、イタリア？」

もちろん、スペインの家のこの部屋は、ちょっと廃れているが、血  
だらけではない。

血なんか見えない。三人も、血まみれではない。

イタリアに、何が見えているのだろうか。

「ん、何だよ……、うるせえな……」

ムクリ、と起きたロマーノ。

スペインが言った。

「うわ！ロマーノ！よかった、よかったで！」

ロマーノが、あ？と訊く。

「何もないんやな、無事なんやな！？よかったわ、無事で……」

ここで、ロマーノまで問題発言をした。

「な、何だよ、もう一回言ってみろ!!」

「え？無事なんやなんもなかったんな、よかったわ、無事ぶじでで……」

「スペイン、俺に死んでほしかったのかよ！サイテーだ、お前!!」

「な、なんでやのん!!!!??」

「何が起こってるんだ……」

「さあ、わかりません」

ドイツは冷や汗をかいていて、日本は震えていた。

イタリアは布団にくるまって怯えていて、ロマーノは部屋を飛び出していった。

そうだぞ、これが、今の、俺らなんだ。

だけど落ち着いて、僕たち。

必ず、必ず、助けに来るからなこのやろー！

僕たちみたいにならないように、助けてあげるからね！

日本は窓を見た。

暗い中、反射する自分の顔と、

カナダをみた。

「か、カナダさん？」

ドイツとスペインは話し合った。

「俺の考えだと、イタリアは、目に見えるものがすべて、命がなくなつたように見えるのではないだろうか」

「そんなんあるん？」

「わからないが……」

「せやけど、こう考えるしかないんやね」

「まあ、そういうことだ、おそろく……」

「ドイツがえらい非現実的やんな」

「魔術的な本を以前読んだからな」

「んじゃあ、ロマーノは？」

「聞いたことがすべて悪性になつて耳に入るのではないだろうか」

「そんなんあるん？」

「わからん」

「でもそう考えるしかないねんな」

「そうだ」

「だから、心配した言葉が逆の意味に聞こえたんやな？」

「おそろくは」

と、勝手な想像にまとめた二人。

しかし、かなりの中している。

実際に二人はそうだから。

では、なぜ、二人が？

まさか、やはり。

黒い星？



？

「カナダさん、何故ここに？」

「あ、日本さん。気づかれちゃったんだね」  
「家のはずれの、木の陰で。」

日本は、存在感いっぱい、いつもと違うカナダと対面していた。

「行方不明だったのではなくて……？」

「クマ次郎さんと遊びに来たんだ、イタリア君達がどうなってるか  
気になって」

「ソウダゾ」

クマ次郎が同意した。

「なら、アメリカ君のところに行かなくて良いのですか？」

「アメリカの話は、止めてくれないかな」

「え？」

「大嫌い。殺したい。ずたずたにして、跡形もなく……」  
「寒気がした日本。」

「な、何を仰って……」

「でも今は、絶対ボロボロなんだろうな、願い事しちゃうから」  
「明らかに、今行方不明になっているアメリカを知っての発言だ。」

「怖いこと、だね、ごめんね、俺」

自分に話しかけたのだろうか。

「あ、呼ばれた。行かなきゃ」

「カナダさん！！」

カナダは、何も言わずに、森の奥に入ってしまった。

「っ……」

日本は、よく意味が分からなかったが、  
カナダがやはりおかしくなってしまったことだけは、身を以て知った。

これは、黒い星の所為？

？

ああ、集まった。  
七人の人たち。  
この人たちなら、壊してくれる。  
私はそう思う。

「  
始めるか」

「ええ、ボス」

私は、この方達を待ってたのかしら。

？

次の日。

日本は久しぶりに胃腸薬を飲んだ。

やっぱりことを抱え込むのは苦手だ……

ドイツさんに言った方が良いでしょうか。

何か、迷いがあるんです

言ったら、また何かあるのではないのでしょうか。

一回部屋に戻った日本。

その途中、ロマーノに会ってしまった。

彼は、耳を塞いでくるまっていた。

「……………っ」

まだ、スペインさんのことをどうか思っているのでしょうか。  
しかし、一体スペインさんが一体何を……？

「ドイツさん！」

ドアを軽く開けて言った。

「イタリア君は、どうでしょうか……」

ドイツはこちらを見ていった。

「イタリアは、寝ている。が……」

「ん、言い辛いんやけど」

アジア組全滅？

「どういふことですか……？」

中国をはじめ、香港も、台湾も、韓国も、マカオも、ベトナムも、タイも、

連絡が繋がらないらしい。

どういふことか、というと、

行方不明ということだ。

「ええっ……」

日本は目眩がした。

私以外の皆さんが、いない……？

そんな……

ねえ、大人の僕。気が付いてる？

見えなくても、聞いて。

いまは、大人のお兄ちゃんも寝てるから。

だってお兄ちゃんが寝かしたよね？

うるせーぞこのやろー！なんだよ大人の俺様！  
ねないっいたらありやしねー！

「え、誰！？」

僕は、僕だよ！

ねっ、大人の僕！

「ヴェー！？どういうこと？」

俺様は、天下のイタリア「ロマーノ」だぞ！  
むっかしの、お前たちってことなんだよ！

「え、意味わかんないよ……」

おいこの大人の俺！まーだこねえのかー？

「ちよっ、待て待て！ここはなんなんだ！？」

「に、兄ちゃん！！」

「ヴェ、ヴェネチアーノ！何でここに居るんだよ！」

「兄ちゃんこそ、何で？？」

話したいことがあつたからだよ。

大事なことなんだからな！

「大事なこと？」

「何か俺らに関係することなのか？」

今の君、違うね、僕には、とっても関係するよ。

もちろん俺にもな！

うん。

今の僕たちの、するべきこと

だよ。

？

「彼らの接触を確認。予定通りです」

「そうか」

「私 暇ですね」

「次はアイツ？イギリスっすか」

「初めに手を掛けるのは、イギリスだろうな」

「貴方の番ですよ」

「あーあ、めんどいっす」

？  
（後書き）

あけおめです。初めまして皆様。

あ？

……あー。

気絶してたのか、俺。

「んー……、あ？」

彼は腕をみて、呆然とした。

「何だ……、これ」

そこには、黒い波線が縦に描かれていた。  
棘が付いているようだった。

……バラの……<sup>つた</sup>蔦？

なんだよこれ。

服で拭ってみた。

だけど取れない。

刺青の様になっている。

……消えるだろうな？

自問自答でこの問題は終わった。

で、ここはどこだよ。

俺ん家じゃねえし。

「あ、イギリスのやろー！」



シーランドがこっちを指さして叫んだ。

「なんだよ、お前！何でここにいるんだよ！」

「イギリスのやろーこそ、何でここにいるんですか！ここは、ミクロネーシヨンの会議場ですよ！」

……えー。

「でもなんで……」

「どうでもよくないっすか？」

「っ！？」

イギリスは振り向いた。

シーランドはニヤついていた。

そこには香港がいた。

「ちいーっす」

「な、香港！？」

「お久しぶりっすね、まあどうでもいいっすけど。」

香港の周りには、黒いオーラが纏われていた。  
目に、光がともっていない。

あのときの、イタリアの様に。

「んーと、自分の腕を見たらどうっすか？」

腕？腕には、さっきの模様がある。

ちらっと見たら、イギリスは驚いた。

あっ……。

イギリスは戦慄した。服の上から、見てもわかるほどだった。黒いものが渦巻いている。香港の様に、黒いオーラ。袖をまくった。そこには。

「はぁ！！！！？？？」

？

真つ暗な世界で、イタリア達は、背中を合わせて座り込んでいた。この空間で響く声を聴きながら。

でえ、僕は、大人の僕たちにとって、負の塊なんだ。もう一つの世界の、終わってしまった僕、ってことかな？

ちげえよ、俺達は、別の、もう一つの世界の、失敗してしまった、俺たち。

失敗しちゃった俺たちは、消えちゃったんだよ。

神聖ローマみたいに、ね。

「え、え！？」

「ま、まず、姿を見せろ！」

良いのかな、怖がらないかな

恐がるに決まってるだろこのやろー！

「だ、大丈夫、怖がらないよ！」  
「そ、そうだぞ！」

だつて！

じゃあ……

「っ！」

「お、俺、か？」

そこには、血まみれの、血で濡れた、ちいさいイタリア達が、手をつないで突然現れた。

選ぶ道を間違えた、そのなれの果て。  
神聖ローマと、同じような道。

怖がつてる？そうだよね……

でも、僕たちは、僕に何もしないよ。

俺たちを、助けるだけだ

そう言つて、二人はそれぞれに、近寄つた。  
そして、

ヴェネチアーノは目に、  
ロマーノは耳に、



？

「……ドイツさん、寝ないのですか？」

「寝れるわけないだろう」

「そうやなあ……」

スペインの家。

ロマーノはキッチンのところで寝ていた。

なので、ドイツが、

かつい……いや、

お姫さ……いや、

ふつうに、イタリアの横に寝かせてやった。

それで、三人は、彼らを見守るように見ていた。

夜中になっても寝ることはできない。

寝ることができない。

突然。

イタリアの体がびくん、とはねた。

ロマーノの体はベッドから落ちた。

「うあああああああああ！……」

二人が叫ぶ。

三人はそれぞれ、彼らの名を叫んだ。

イタリアは、目を抑え、

ロマーノは、耳を抑え、  
苦しそうに喘いでいる。

「ど、どうしたんだ!!??」

「イタリア君、ロマーノ君!!!」

「ああ、もう、なんやのん!!??」

困惑した。

?

暗い闇の世界で。

イタリア達は倒れていた。

目を抑え、耳を抑え。

ごめんね、僕。

でも、起きたら、片方は治ってると思う。

起きたらやることは一つ。

世界を、ゲームから守ることだ。

もう始まっているけど、皆には、命が二つずつ配られるんだ。  
呪いに捕まった国が、敵なんだよ。

倒れていた二人は、痛みを堪えて座るにとどめた。

「の、呪い？」

今の俺たちは呪いにかかっている。  
だから、俺たちも敵の一人。

「そ、そんな！」

「呪いを解く方法はねえのか!？」

あるよ。一度、死ぬの。プラトニックに関係してね。

「プラトニック？」

プラントトニック。

ちよっといじられて、プラトニック。

呪いの元凶だよ。

これに、体のどこかを支配させられる。それが、呪い。

「じゃ、じゃあ、俺は、目にそれを？」

「俺は耳ってことか？」

うん。

現に、僕の目には、バラの蔦の模様があるはず。

兄ちゃんは、耳にあると思うよ。

それが成長したら、暴走するんだ。  
他国をも殺しかねないんだぞ。

で、僕たちは、脳に植えられてなくて良かったな、って思ってる  
よ。

脳は、えーと、五感？四肢、の、自由？

全てが支配されることになるんだよ！

何人かは支配されているはずだぞ！

「どうすれば、このゲームは終わるの？」

呪いのかかった国を殺して、呪いを解いて、ボスを倒す、結構難しいことなんだよ！

だから、皆に、このこと、伝えられるだけ、伝えて！

「……」

信じられない。ことが勝手に進んでいる。でも、やるしかないのだろう。

「わかった」

「おう」

じゃあ、そろそろ起きなきゃね。

片方だけ、治ってるはずなんだ。頑張れ！



？（後書き）

長  
つ  
た  
ら  
し  
い  
説  
明  
で  
し  
た  
、  
す  
み  
ま  
せ  
ん  
！

？

？

「なっ！！！」

イギリスは戦慄するしかなかった。  
模様の長さが、手の甲までいつていた。  
さっきまでは、手首までしかなかった。

「成長の speed が速いんですね、ふうん」

「な、なんだよ！」

「シー君は、ここに呼ばれたんですよ！」

え？

香港は何やったんだ？

「ドッキリって聞いたですよ、イギリスのやるー！」

「つつ……」

ドッキリにはやり過ぎだろう！

「さて、なんだか意外な展開でしたから？俺帰る的な」

「ま、待て香港！どいつももりだ！？」

香港はこっちを向いて、笑った。

「人形作り、しに来ただけっす」

そして、何も言わず、どこかに走って行ってしまった。

どういうことだ、人形？

……

「何考えているんですか……？」

シーランドがイギリスの顔を覗き込んだ、その時。

ぼきいっ

と、骨の折れた音がして、  
イギリスが、

「ぐあっ」

と、悲鳴を上げた。

あっと言う間に、イギリスは、シーランドの首に手をかけていた。

その手はもう、本人の意思とは無関係に

「くあ、な、なに、を……」

やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい

「逃げろ、シーランド……！」

「逃げれるわけ……ない、です……よ」

殺す。

?

……ん？

「う……ん」

「ん？」

「イタリア……！」「イタリア君……！」「ロマーノおお……！」

やっぱり三人は駆け寄った。  
スペインに至っては、涙目で歓喜していた。

「兄ちゃん」

「ヴえ、ヴェネチアーノ」

「見えるよ、片方だけ！」

「聞こえる、片方だけ！」

『やった……！！』

そんな会話に、三人が良くわかるわけもなく。  
しかし、ドイツと日本はすぐに気付く。

「治ったのですか……？」

「見えるのか、聞こえるのか……？」

「わ……！元気ならそれでいいんやあ……！！」

スペインは二人に抱きついた。

「えへへー、元気だね！」

「抱きつくな、このやろ……！！」

しかし、このままだと、もう片方でいろんなことになりかねないの  
で、

ヴェネチアーノの右目に眼帯、  
ロマーノには、耳あてをした。

そして、二人は、昔の自分達に言われたことを、三人に言った。

この場に居た人間は気づかなかった。  
窓の陰に人形が置いてあることを。  
その人形が、真っ黒だということも、  
わかるわけがなかったのだ。

？

「まあ、迷惑なのよ……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0699z/>

---

【ヘタリア】追憶のヘタリア

2012年1月5日18時53分発行